

東京周辺の難読駅名 駅名に潜む歴史と不思議

◆ どっちでもいいような話

会社勤めをしていた頃の話、長く関西支店で仕事をしていた人が東京へ転勤してきた。この人と総武線の本八幡駅で落ち合う約束をした時に聞いた話だが・・・。

乗車駅で乗車券を求めると、自動券売機の上部に掲示してある五十音別に並べられた行先別料金表を見たが本八幡が見つからない。悩んだ挙句駅員に聞いたと言う。この人は本八幡を「ほんはちまん」と読むと思っていたようだった。彼の頭の中には、「本(ほん)」「八幡(はちまん)」と染みこんでいたと言う。

関西圏の鉄道地図を見ると、京阪電鉄に石清水八幡(いわしみずはちまん)、叡山電鉄には八幡前(はちまなまえ)・三宅八幡(みやけはちまん)という駅がある。また、「上本町(うえほんまち)」という駅もある。

関東圏を眺めると、信越線に群馬八幡(ぐんまやわた)駅があり、内房線には八幡宿(やわたじゆく)、京王線には八幡山(はちまみやま)という駅もある。群馬八幡駅は、現在は群馬県高崎市八幡町(やわたまち)にあるが、駅が出来た当時は群馬県碓氷郡八幡村(やわたむら)だった。上野国一社八幡宮(こうずけのくにいっしやはちまめぐう)があることで八幡村(やわたむら)と名付けられた。この八幡様は通称として「八幡八幡宮(やわたはちまめぐう)」と呼ばれたらしい。

京王線の八幡山駅は、杉並・世田谷の境界にある。駅周辺の地図を探してみたが、八幡様は見あたらなかった。後日談だが、石清水八幡がある町は市制に移行して「京都府八幡市(やわたし)」となったようだ。

しかし元の話に戻れば、本八幡(もとやわた)も葛飾八幡宮のお膝元の町

◆ すむか にごるか どっちだろう

世の中は澄むと濁るで大違い 刷毛に毛があり禿に毛がなし

中学生の頃にラジオで聞いた落語でおぼえた狂歌だが、若くて新鮮な頭脳に固く焼き付き、何才になっても忘れることはなかった。「刷毛」と「禿」以外にも何かないだろうかと色々考えて見たりしたものだった。「蓋(ふた)」と「豚(ぶた)」、「桁(けた)」と「下駄(げた)」など類例を思いついたが、替え歌にはたどり着けなかった。

上野駅から東北本線の各駅停車に乗ると、最初に停まる駅が「尾久(おく)」。駅の表示も「尾久(おく) OKU」となっているのだが、「おく」と言う人が多い。(尾久駅はこちら <https://yahoo.jp/aEdZZ8>)

江戸の奥にあることから「奥」と名が付き、それが尾久という当て字に変わったとする説が有力だったのだが、あまり根拠のはっきりしない俗説らしい。吾妻鏡には「犬食名」という地名表記があるが、これは誤記で本当は「大食名(おおぐいな)」で、これが後に「おく」に転じたのではないかという説もあるという。また、この地は鎌倉時代には鶴岡八幡宮の社領となっており、「武蔵国豊嶋郡小具郷」という表記も残されているという。

もうここまで来ると素人には判断は不可能になる。

国土地理院の地形図で確認すると昔の地形が想像できる。尾久駅の北東に広がる平地は海拔 3.5m程度で、隅田川の岸辺の東尾久や町屋は 1.5mにも満たない所が沢山有る。かたや尾久駅の西側には滝野川から飛鳥山にかけての海拔 20~25mの断崖が連なっている。太古はここが海岸線(入江)であったに違いない。

◆ 消えた町に残った駅

常磐線で日暮里の次に停まる駅が三河島(みかわしま)。京成本線にも新三河島(しんみかわしま)という駅がある。駅周辺は海拔 3m前後だが、東へ向かうにつれて低くなり尾竹橋通りを横切ると 2m台になり、都電荒川線を横切って千住大橋付近まで進むと 1.3mになってしまう。

土地の人は正しく読むことができるが、他所から来る人は「みかわじま」と読んでしまうことが多い。

地名の由来は諸説あるようだが、有力な説が見あたらない。鎌倉時代の小田原北条氏の資料に三河ヶ嶋の表記があるとされているので、古くから存在する地名であることは確かなようである。

我々の世代の人々は「三河島事件」という言葉の印象が強い。昭和37年に発生したこの事件は、貨物線から

本線に合流しようとした貨物列車が側線に入って車止めに激突して脱線転覆。そこへ走って来た常磐線の下り列車が衝突、さらにここへ上り列車が突っ込むという大惨事になった。

事件当日の早朝に地震がありダイヤが乱れていた上に、それぞれの列車の動きが通常よりも遅延していて、そこへ信号の認知に不具合があったらしく、結果的に160人の死者が出た。

この事件を契機に、国鉄の自動列車停止装置(ATS)の開発が進むことになったのだが、歴史年表上でもうひとつの大きな変化が起きてしまった。「三河島という地名が持つ負のイメージ」が尾を引き、やがて三河島町という町名は消滅して、「荒川何丁目」などの地名に置き換わってしまい、駅名だけが残ることになった。

(三河島駅はこちら <https://yahoo.jp/ALZ87A>)

◆ エゴが許されるか エコが大事か

池袋から西武線に乗ると三つめの駅が江古田(えこだ)。東京へ出てきた当初は、「えごた」と読むものと思っていた。中学生の頃に鉄道路線図に入っているふりがな表記を見て「えこだ」であることを知った。

それでも何となく納得が行かず、わざわざ西武線に乗って事実を確認してきたことがあった。しかし頭の中では、「えこだ」では不協和音のようでおかしいなといつまでも拘っていた。

地名の由来を調べてみた。多説あり有力な情報に絞られていなかったようだが、江古田の森のあたりに「江古寺(えごじ)」という寺があったことによるという情報がにわかに有力になってきたらしい。平成15年頃に看護学校を建設するにあたり、14~15世紀頃の寺院の跡と思われる遺構が発掘された。中野区のホームページの情報によれば、これまでの「エゴノキの原があった」という説よりも遙かに信憑性があるとのこと。

文明9年(1477年)に太田道灌が武蔵野の豪族豊島氏と戦った戦を「江古田原沼袋合戦」と言い、道灌が記した資料の中にも「江古田原」という表記が残されているので、この時代に既に江古田という地名は存在していたことがわかる。

現在、地名としては「中野区江古田(えごた)」となっているが、鉄道の駅名では西武線で「江古田(えこだ)」、大江戸線では「新江古田(しんえごた)」と言うことになっており、バス停留所に至ってはバス会社により異なるという状態になっている。私が納得できないのも許される範囲のようで安心した。

(江古田駅はこちら https://yahoo.jp/3Wd_e8)

◆ これもまた死語か

八王子と東神奈川を結ぶ横浜線沿線は、都心からさほど離れていないにもかかわらず、小田急線と交差する町田周辺以外は「不便な所」という認識が大勢だった。

しかし、1966年に東急田園都市線が全通するとにわかに人気上昇し、渋谷と大井町からの東急の鉄道網が長津田に接続することで、横浜線沿線は一気に「便利な町」になった。今では便利で暮らしやすい町として人気のある住宅地になってしまったようだ。(長津田駅はこちら <https://yahoo.jp/DPU-tM>)

何カ所かの高台から縄文時代と考えられる遺跡が発掘されているようなので、この土地の歴史は古く長い。古代、律令の時代には荏田に都築国府があり、府中に武蔵国府があり、国府と都・国府と国府を結ぶ街道が走っていた。長津田は要のようなところだったらしい。

江戸時代の長津田は大山街道の宿場町で、大山信仰を通じて大変賑わった。また横浜港開港後は、八王子と港を結ぶ絹を中心とした物流の中継点にもなった。

今日の長津田駅は、鉄道網の中核に位置するようになりはしたが、正しい駅名で読まれることは少ないようだ。多くの人が「ながつだ」と読むが、「ながつた」と読むのが正しい。

「谷津田が長く連なる」ことからこの地名になったという情報が主流のようだ。町田の海拔100m前後の山から流れてくる恩田川に沿った谷津田を「長く連なる谷津田」と言うのだろうか。

地名の由来から考えれば、「ながやつだ→ながつだ」のほうがしっくりするようにも感じるのだが……。

谷津の地形に付く地名は、千葉県では「谷津(やつ)」が多いが、東京都・神奈川県では「谷戸(やと)」が多いと言われているので、少しばかり気になる。しかし神奈川県でも鎌倉へ行くと「扇ガ谷(おうぎがやつ)」のように「やつ」という読み方が多くなる。もう少し掘り下げていくと何かわかるのかもしれない。

余談だが、岩波国語辞典(第四版)を見たら、「谷津」も「谷津田」も載っていなかった。これもまた死語か。

◆ 鶴の首と港町の地下鉄

鶴が空を飛ぶ姿に似ていることから、群馬県は「鶴舞の国」とも言われている。その群馬県の南部で、鶴の首のあたりになる所に伊勢崎市がある。浅草から東武線で太田・桐生方面へ向かって北上する時に通過する駅で、JR両毛線とも接続しており北関東の鉄道網の中では主要な駅になっている。

伊勢崎は 5~6 世紀に築造されたと思われる古墳がいくつも発見されており、強力な豪族が支配していたことがうかがえる。平安時代に建てられた寺やその遺跡も数多くある。9 年前になるか、権現山古墳を訪れた夏の暑い日のことを思い出す。(伊勢崎駅はこちら <https://yahoo.jp/-TSAFk>)

佐位郡と那波郡という二つの郡(こおり)があった。佐位郡に力を持つ瀧名太夫兼行(藤原秀郷の子孫)が、1108 年の浅間山の噴火で荒れ果てた土地を再開発して瀧名荘が成立した。瀧名氏はのちに、足利俊綱の家臣桐生六郎に敗れて没落。鎌倉幕府の役人である中原氏がその後を継承。のちに隣的那波を合わせて那波城(別名:堀口城)・赤石城が構えられる。ここまでの歴史の中には、まだ伊勢崎という地名は現れない。

中世に入ると赤堀氏・那波氏などが支配していたが、大きな勢力として育つところまでには至っていなかった。その後、上杉の家臣由良成繁が所領として手にした。伊勢神宮の加護の賜物とした由良氏は、所領の一部を伊勢神宮に寄進し、赤石の地に伊勢神社を勧請した。

これにより伊勢神社の門前町が形成されて栄え、「伊勢の前(さき)」と言われるようになり、伊勢崎が誕生した。その後由良氏は北条氏に近づいたために、1573 年に上杉の手により城を焼き落とされてしまう。

1590 年、北条氏の滅亡により、1601 年に徳川家康の家臣稲垣長茂が関ヶ原の合戦の論功行賞として与えられ、伊勢崎藩初代藩主となった。

火山灰地で水はけが良く、桑の栽培と絹織物の生産が盛んに行なわれてきた。

伊勢崎は、「いせさき」と読むのだが、この街に住まない他所者の中には、「伊勢の前(いせのさき)」を知らないもので「いせざき」と読んでしまう人が多い。

一方では横浜市には「伊勢佐木町」という町があり、市営地下鉄ブルーラインに「伊勢佐木長者町」という駅がある。一見すると「いせさきちょう」と読みたくなるのだが、実はこれは「いせざきちょう」と読む。

江戸時代に海辺の村である横浜村は横浜港開港後、急速に発展したために土地が足りなくなり大岡川の河口の入江を埋め立てることになった。そしてできたのが吉田新田で、今の地図で見ると京急の黄金町駅前から海に向かって広がる長い三角形の平地が、埋立ててできた所である。

明治 2 年にここに港崎遊廓ができたが、明治 7 年に高島町に移転。その後再び整備されて伊勢佐木町が生まれた。この整備事業に際して、道路改修費用を寄付した伊勢屋中村次郎衛・佐川儀右衛門・佐々木新五郎の三人の名前から文字をいただいて町の名前にしたと言われている。

伊勢佐木町という町は、黄金町駅前から関内駅付近までの南西から北東に並ぶ細長い町で、1 丁目から 7 丁目まである。長者町はこれとクロスする位置関係で、日ノ出町駅と車橋を結ぶ北西から南東に並ぶ細長い町。伊勢佐木長者町という駅名はその名のとおり、伊勢佐木町と長者町の二つの町に気を使って出来たもので、この二つの町が交差する場所に出来たと思いきや、伊勢佐木町からは少し離れた長者町の中にある。

(伊勢佐木長者町駅はこちら <https://yahoo.jp/t7O4tO>)

市営地下鉄「ブルーライン」は、東急田園都市線のあざみ野駅を出て、新横浜駅・横浜駅などを経て埋立地の真ん中を突っ切って、小田急江ノ島線の湘南台駅までを走る。不便だったところを便利に走る新しい路線である。もうひとつ有る市営地下鉄の路線名は「グリーンライン」、鉄道路線名もバター臭いのが横浜なのか。

難読地名・難読駅名がしばしば話題になるが、命名の経緯が不可解な難解地名も世の中には沢山ある。

地名や人名にはその名を付けた背景や選んだ人の考えがあって、それがわかることで興味が増すことが多い。

しかし中には、命名の経緯がわかって落胆するものもないわけではない。

地名や駅名は、後の世まで残って語り継がれるものなので、もう少し考えたらよかったのになど残念に思うことも多々ある。